NK 高级日语系列教材

[第二版]

日本文化概论

韩立红 编著

南開大學出版社

高级日语系列教材

日本文化概论

（第二版）

韩立红　编著

南开大学出版社
天　津

图书在版编目(CIP)数据

日本文化概论 / 韩立红编著. —2 版. —天津:南开大学出版社,2006.8(2010.1 重印)

(高级日语系列教材)

ISBN 978-7-310-01989-2

Ⅰ.日… Ⅱ.韩… Ⅲ.①日语—教材②文化—研究—日本 Ⅳ.H36

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2006)第 050936 号

版权所有 侵权必究

南开大学出版社出版发行

出版人:肖占鹏

地址:天津市南开区卫津路 94 号 邮政编码:300071

营销部电话:(022)23508339 23500755

营销部传真:(022)23508542 邮购部电话:(022)23502200

*

天津泰宇印务有限公司印刷

全国各地新华书店经销

*

2006 年 8 月第 2 版 2010 年 1 月第 8 次印刷

880×1230 毫米 32 开本 10.75 印张 2 插页 284 千字

定价:18.00 元

如遇图书印装质量问题,请与本社营销部联系调换,电话:(022)23507125

序 一

我国大学的日语教学界自 20 世纪 80 年代末逐步开始了与国际日本语言文化教学模式接轨的变革，其重要内容之一是在日语语言文学专业本科生的教学课程体系中加大日本社会文化课程的力度，在研究生培养中增设日本文化研究方向，旨在拓宽学科领域，培养适应 21 世纪社会发展需要的“复合型”、通用型人才和高素质的创新型人才。然而我国重点高等院校中的日本文化教学和研究虽然取得了有史以来的最大发展，但是关于日本文化课程的教材建设却明显滞后，迄今为止国内还没有一本以日语写作的点面有机结合的《日本文化概论》教材。

据我所知，我国现已出版的有关日本文化的部分教材，大多是讲述日本的衣、食、住、行等生活文化以及日本的茶道、花道、歌舞伎等方面内容的，这些基本知识对于日语语言文学专业的教学无疑是不可或缺的，但如果仅停留在介绍这些日本文化的表象，则不能使学生综合而深入地了解和把握日本文化的精髓及其特质。韩立红博士用日语编著的这部《日本文化概论》教材，正好解决了这一问题，具有填补空白的意义，今将出版，实为可喜可贺。

《日本文化概论》这部教材是韩立红博士结合自己多年的研究和文化课教学实践，花费了四年时间编著的。我作为第一个读者，读后受益良多。它不仅在体例方面有诸多创新，而且在内容论述方面颇见深度。作者从日本的精神文化入手，从日本文化的基本特征——开放性开始，到生产方式的稻作文化特征、基于“家制度”的纵向型社会结构和重实用的文化心理结构特征，以及天皇崇拜的历史根源等，层次分明地展开论述，不仅论及日本的哲学、宗教、文学艺术、教育、

风俗、技术、科学等几乎所有的文化领域，而且提纲挈领地概括了日本文化的特质。同时，该著作对有关“日本文化论”及“日本人论”的日本学者及外国学者的重要学术观点也进行了分析评述，诸如中根千枝的纵向社会的人际关系理论、土居健郎的“依赖心理结构”理论、本尼迪克特的“耻感文化”论等日本文化研究领域具有代表性的学术观点，均在本书中有所论述。

多年来我一直思考一个问题：同为人文学科，为什么外语学科出身的人既容易出季羡林先生那样学贯东西的大师，而一般外语学科学生的综合人文理论水平和问题意识与文史哲出身的学生相比却又有一定的差距。近年来对这一问题似乎想明白了些。即是说，对于外语学习者来说，学习一门外语就意味着要掌握母语以外的另一种语言所构筑的一整套文化传统，“获得一种新的对世界的看法”，因此它比其他文科学生多了一种文化参照系，有利于其人文思维的发展；但是另方面，外语学科的学生进入大学后必须将大量时间用于练“外语功”，且其方法多以“模仿”为主，久而久之就会形成一种“趋同思维定势”，这无疑又不利于其人文思维的发展和思辨能力的培育。因此我们外语学科的学生要增强人文素质和思辨能力，就必须加强文化课的教学，并在教学中特别注重对对象国精神文化的特质及其形成原因和逻辑的探究和分析。韩立红博士的这部《日本文化概论》，就是以考察论析日本精神文化的特质为主线展开的，其目的是以此激发学生对日本的思想、宗教、历史、政治等人文问题的关心和研究欲望，激励学生对其与本国文化关系的思考和学术兴趣，这对于培养新一代日本问题研究者所必要的较强思辨能力和创新意识，无疑大有裨益。

为了扩展学生的知识面和增强其对日本文化事象的解析能力，该书还穿插了“关联知识”，并将具体的文化现象与其特质相结合展开论析，做到了既涵盖面宽，又理论联系实际，既突出了重点又照顾到了相关的“面”。特别是其“以点带面”的著述方法，较好处理了“点与面”、“深度与广度”的关系。例如，作者在论述日本文化的基本特征

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

——开放性和主动性时，不但论析了日本文化形成和发展进程中的“开放性”和“主动性”特点，还以点带面，将日本历史进程中几次大规模吸收外部文化的史实和内容，以及体现在现代日本文化中的外来文化和日本固有文化的变异内容一并编在书中，以利学生不是空洞地增强理性认识，而是“有血有肉”地认知和把握日本文化的性质和特征。

我相信，本书的出版必将为中国日语语言文学学科的文化课程的建设以及日本文化研究者的培养作出有益的贡献。

北京大学
日本文化研究所所长
刘 金 才
2003年盛夏，于北大蓝旗营书斋

序　二

本書の著者韓立紅博士は、10年ほど前に南開大学より立教大学の大学院に留学し、日本文化研究に研鑽を重ねておられました。そのおり博士は、日本近世中期の石田梅岩の思想に関心を持たれ、当時武蔵大学人文学部日本文化学科（現在は日本・東アジア比較文化学科と改称）に勤務中で、石田梅岩とその門流たち、いわゆる石門心学と呼ばれる思想を研究対象にしていた私の研究室に来訪され、私と共に約一年間、心学関係資料を研究されました。

ちなみに石田梅岩は農家出身でしたが、京都の商家に町人として勤めながら、まったくの独学で中国より日本に伝えられた儒学哲学を基礎にし、日本の神道・仏教の思想をも取り入れて、倫理道徳と経済との在り方について、独自の哲学を主張した人物です。博士の優れた日本語の能力とも相まって、その研究成果は中国に帰国後、『石田梅岩と陸象山思想の比較研究』として出版されました。同書は、博士を含めた南開大学の日本研究の質の高さを示すものと言えます。また私の定年後の2003年2月には両大学の間で、相互の「留学協定」が結ばれ、より一層関係が深くなったことは慶賀の至りです。

韓立紅博士は、その後2004年4月に東京のぺりかん社より、私と山本真功氏共編の「季刊　日本思想史65号」の「特集　石門心学」に、「中国における石門心学思想研究の現状とその展望」を発表され、さらに国学院大学の海外招聘研究員として来日中にも、2005年11月12日の石門心学会において、「石田梅岩と陸象山の

思想構造の比較」の題で研究を発表されました。この二つは日本の専門研究者からも高い評価を受けております。

以上に私が博士の専門研究分野の業績について触れた理由は、このような諸研究を基礎にした上で、巻末の「人名・書名・文献名索引」からもうかがわれるように、博士の日本文化全般にわたる幅広い関心と研鑽の成果が、この『日本文化概論』と名づけた本書となって結実した点を強調したいからです。

本書の執筆目的や、構成と内容については、北京大学の劉金才先生の、まことにご懇切かつ適切なご紹介があり、私がこれ以上に付け加える必要はありません。一言付加するならば、中国の過去から現在に至るまでの諸文化について、日本の学生に教授するときに、このような現代の中国社会と人々の日常生活にも広く目配りした書物、例えば『中国文化概論』とでも題すべき書物を、はたして日本の若い中国研究者が書けるか否かという疑念を禁じえないという点です。

韓立紅博士の日本文化教授への熱意から生まれた労作に、心から敬意を表すとともに、この書を機縁に中国と日本との相互理解が、若い人々の間に深まることを期待いたします。

2006年2月

武蔵大学名誉教授　今井淳

目　次

序一

序二

第一章　日本文化の基本的な特徴——その開放性と主体性 / 1

一、日本文化の開放性と主体性 / 1

二、基本的特徴の形成要因 / 9

三、大化改新と隋唐文化の吸収 / 12

四、明治維新と西洋文化の吸収 / 19

五、敗戦とアメリカ文化の吸収 / 27

関連知識一： / 34

1. 朝鮮文化の吸収　　2. インド文化の吸収

3. 南蛮文化の吸収　　4. 蘭学の吸収

第二章　稲作文化の特質 / 40

一、稲作文化の上陸 / 40

二、集団主義の形成 / 41

三、親植物性 / 44

四、繊細性 / 48

五、勤労性 / 51

六、自然への順応と多神論 / 52

関連知識二： / 55

1. 稲作と相撲　　2. 米と日本人の食生活

3. 日本の家屋　　4. 日本人の衣生活

5. 日本人の好きな植物

第三章　「家」を基盤とする「タテ」の社会構造 / 74
一、「タテ」の社会構造 / 74
二、日本の「家」制度 / 81
三、中日の「家」制度の比較 / 84
四、日本の「家元」制度 / 88
関連知識三： / 90
1. 日本企業の三大特色　2. 日本人の社会生活
3. 日本人の人間関係　4. 日本人の暮らし
5. サラリーマンの世界

第四章　実用を重んじる文化心理 / 110
一、日本人の「即物主義」的な性格 / 110
二、日本人の「実用主義」的な宗教観 / 116
三、中国儒学の吸収 / 127
四、日本の儒学 / 132
関連知識四： / 145
1. 日本の新宗教　2. 神道と日本人の生活
3. 仏教と日本人の生活　4. 多元化した日常生活

第五章　日本人の「無常」観 / 168
一、「無常」と日本文学 / 168
二、「無常」と日本人の危機感 / 173
三、「無常」と日本人の死生観 / 176
四、「無常」と日本人の美意識 / 179
関連知識五： / 183
1. 「もののあはれ」　2. 「幽玄」と「わび」、「寂」
3. 「いき」　4. 「幕の内弁当」

第六章　天皇崇拝の伝統 / 185
一、天孫降臨と国体思想 / 185
二、天皇崇拝と儒教の「忠孝」思想との結合 / 190
三、象徴天皇への変貌 / 192
四、日本の歴史 / 194
関連知識六： / 203
1. 皇室の歴史　2. 元号　3. 国学と尊王論
4.「君が代」と「日の丸」　5. 天皇の国事行為
6. 天皇、皇后、皇太子、皇太子妃
7. 日本列島　8. 古代の行政区画図

第七章　日本人の「甘え」 / 209
一、「甘え」の文化心理 / 210
二、「甘え」の人間関係 / 213
三、「甘え」の社会体制 / 217
四、「甘え」の病理表現 / 219
関連知識七： / 224
1.「感謝」にも「謝罪」にも使う「すみません」
2.「悔しい」と「甘え」　3.「気がすまない」

第八章　「恥」と「義理人情」 / 227
一、日本人の「恥」 / 227
二、義理人情 / 232
関連知識八： / 238
1. 相克する「義理」と「人情」
2. 近松の作品に見る「義理」「人情」
3. 赤穂事件と「忠臣蔵」　4. 現代の義理人情

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

第九章　日本人の「道」思想 / 244
一、武士道 / 247
二、茶道 / 250
三、華道 / 256
四、書道 / 261

第十章　現代日本に関する知識 / 264
一、ノーベル賞の受賞者 / 264
二、新聞とテレビ / 265
三、雑誌と本 / 266
四、漫画とアニメーション / 267
五、音楽家 / 268
六、美術家 / 269

第十一章　外国人による日本論の名著 / 271
一、戴季陶『日本論』 / 271
二、周作人「日本管窺」 / 276
三、R・ベネディクト『菊と刀』 / 281
四、E・O・ライシャワー『ザ　ジャパニーズ』 / 286
五、李御寧『「縮」志向の日本人』 / 290

参考文献 / 294
後書 / 299
后记 / 302
日本文化史年表 / 304
人名索引 / 311
書名・文献名索引 / 323

第一章　日本文化の基本的な特徴
——その開放性と主体性①

一、日本文化の開放性と主体性

東アジア文明圏或は儒教文明圏、西洋のキリスト教文明圏、西アジア——中東のイスラム文明圏と南アジア仏教——インド教文明圏とが、世界四大文明圏と呼ばれている。その中で、歴史が悠久で、範囲が広大で、成果が輝かしく、影響の深い東アジア文明圏の核となる文明は、中国から発し、中国で形成されたことが分かる。文明の軸心国家たる中国は、常にその周囲の国々に対し影響を与えてきた。

中国文明は、漢民族を主体とする中華民族が、長い人類歴史の発展の中で東アジア大陸という土地の上で、大自然と戦いながら形成してきた文化である。中国文明は、独立的に自主的に独特の伝統文化を創り出し、何千年間の発展を経て春秋戦国時代——所謂中国文明の「軸心時代」——に至って、その基本的な形ができ、秦と漢を経て最終的に定着した。以後、宋代と明代の時期に至って変動があったが、従来の範囲から抜け出せなかった。この文明が自主的に独

①この章の内容は主に武安隆氏の『文化の決択と発展』（天津人民出版社，1993 年）という著書を参考としている。

立的に形成したから、「原生性」、或は「創造性」の文明とも呼ばれている。このような文明が形成されて定着すると、強大な生命力を示す。そして、周囲の異なる文化、或は異なる文明圏と交流し、対峙し、衝突が起こると強力な主導性と自主性を発揮することができる。中国文明のこういう特性について、イギリスの学者ジョセフ・ニーダム（1900～1995）①が次のように述べている。中国と西方の隣国との往来と融合は想像より多かったが、中国の思想と文化の基調的なものが顕著には中断されずに、自発性を保ってきた。

中国文明の自立的な特徴は、その「原生性」に表れているだけではなく、また「単一性」にも表れている。古代から近代まで中国の伝統文明が定着して以来、中国は数多くの多民族間との戦乱を経て来た。また、世界の異なる宗教文明や各文化要素と出会い、さまざまな衝突が発生したが、中国文明の主体と基本構成は、あまり変化することなく、継続的に発展してきた。文化の異なる他民族に侵入され、また一時期支配されたことはあったが、中国文明の主体は変らなかった。かえって侵入してきた民族の方が、強大な中国文明に同化され、或はこの文明圏以外に排除される状態であった。例えば、中国に対して大きな影響を与えた仏教が、東漢の時期にインドから中国に伝来し、隋と唐に至って隆盛期に達した。支配階級によって、仏教は一時期儒教と同じように重視され、また儒教よりもっと重視される時期もあったが、最終的には抑制され、中国伝統文化の一つの重要な構成部分となるに止まり、儒教の付属物でしかなかった。また、イスラム教文化の場合も、７世紀の中葉に中国に伝来し、宋と元の時代以後発展を遂げ、明末清初の時期にイスラム教学者が現われ、イスラム教教育も盛んに行われ、中国の広い地域に影響を与えたが、中

---

①Joseph Needham　科学技術史家・生物学者。第二次世界大戦の時、重慶のイギリス大使館顧問。戦後ユネスコ設立に尽力。ケンブリッジ大学ニーダム研究所長。英国・中国の文化交流に貢献。主著『中国の科学と文明』。

国文化の核心である儒教とは対抗できず、中華民族の主体—漢民族文化に大きな影響を及ぼすことができなかった。結局、イスラム教の存在は儒教に対して脅威を与えない状況のもとに、その存在が可能であった。儒教文化と差異の大きいキリスト教も、中国の唐の時代に伝来したが、大きな影響を及ぼすことはなかった。キリスト教は、元、明、清の時代、中国で宣教運動を行なったが、幾度も中断された。以上の歴史から中国文明の同化力と排除力は、驚くほど強いものであることが分かる。これは、中国文明の「原生性」と「継続性」を示している。

中国文明の「原生性」と「継続性」という特性と比べて見ると、日本の伝統文化は、「開放性」と「周辺性」が特徴となっている。古代の日本は、アジアの東に位置している孤島として、独自に自分の文化を形成させてきた。ライシャワー氏①は、「日本農業文明の発生はヨーロッパ、中東、インド、中国より何千年も後れている」②と述べているが、外来文明がなかったとすれば、日本文明の発展は、また違う状況であっただろう。およそ紀元前三世紀前まで、日本列島では土着文化の縄文文化③が8000年ほど続き、原始の採集文化と旧石器時代の文化であった。家永三郎氏は、「日本列島に閉じ込められた私達の祖先が長い間、石器文化の段階で足踏みしている間に、大陸の漢民族は早くも金属文化の時代を迎え、強大な国家を作っていた。」、「漢民族の四周への発展はめざましく、その余勢は我が日本列島にも及んで、日本に金属文化と農耕技術をもたらすこととなった」④と

---

①「第十一章」を参照。

②『ザ・ジャパニーズ』、上海訳文出版社、42頁、1980年、日本版、1977年。

③紀元前3世紀まで。主に竪穴住居からなる集落を構成し、採集・漁労・狩猟の採取経済の段階にある。土器の表面にひもを転がしたり、圧着したりしてつけた文様から名づける。

④家永三郎著、『日本文化史』、17頁、岩波新書、1978年発行本。

言う。大陸の稲作文化圏の民族が、金属器を携えて日本列島に上陸してから、日本は原始の採集文化から水田農耕段階に入り、旧石器時代から鉄器と青銅器の併用時代に入り、弥生文化[1]が現れるようになった。縄文文化と弥生文化の「混血」によって日本文化が形成された。日本文化は、弥生時代に至ってはるかに先進的な大陸よりの外来文明の浸透によって発展した。日本は、外来文化を抵抗なく、次々と取り入れるようになった。そして、日本列島では飛躍的な変化が起き、日本は、外来文化摂取の過程で「開放性」という文化的特徴を備えるようになった。日本文化の「開放性」によって、日本は中国文化、朝鮮文化、インド文化、さらに南蛮（ポルトガルを主として）文化、紅毛（オランダを主として）文化、西欧文化、アメリカ文化などを自国に取り入れた。なかでも後述するように、大化改新前後における中国隋唐文化の摂取、明治維新時期における西欧文化の摂取、第二次世界大戦後のアメリカ文化の摂取が、日本の外来文化摂取史における三大画期と言える。

しかし、日本文化は単に外来先進文化を積極的に摂取する「開放性」をもつだけではなく、同時に「主体性」を持っている。倫理学者の和辻哲郎氏（1889～1960）[2]は、日本文化から外来文化を取りされば、あとには何も残らないにもかかわらず、日本人はおのれの中身に対し摂取者・加工者としての独立性を保ち続けたと述べ、日本文化の持っている「主体性」を強調した。

日本は、古くから大規模的に外来文化を取り入れたが、外来の思想や文化を摂取しながら、独自の思想や文化を作り上げてきた。そこに日本人の思想や文化の特色がよく表れていて、今日まで基本的

---

①縄文時代の後、古墳時代の前の時代。弥生土器の出現と稲作の開始から始まる。紀元前3世紀から3世紀まで大陸文化の影響を受け、水稲耕作や金属器の使用が始まる。

②倫理学者、東京大学教授。人間存在を間柄として捉え徳論の展開に特色がある。文化史にも業績が多い。著『日本精神史研究』『風土』『日本倫理思想史』など。

に変わっていない。例えば、日本は、6世紀から仏教を取り入れ始め、江戸時代に至ってキリスト教禁教のため作られた寺受け制度などの影響でもあり、仏教が民衆の生活の中に定着し、仏教徒の国といわれるほどであったが、やはり神道の影響力も強かった。平成15年の『宗教年鑑』の統計によると、日本仏教信者数の9555万人に対して、神道系の信者数は1億777万人であった。正月の初詣、結婚式、宮参り、七五三など日本人の生活の中で大事な祭りは、ほとんど神社で行われている。

儒教的徳目の倫理思想も古代から日本に伝わり、仁義礼智信という徳目は、人間関係の根本徳目として、日本人の精神形成に大きな影響を及ぼし、今日においても、集団の一員として人間関係に心を配る日本人のあり方に影響を及ぼしていると言われている。しかし、日本人の心の根底に受け継がれている倫理的な道徳心は、日本的な「心情の純粋性、無私性の追求」であると、相良享氏は言っている。このような日本的な倫理は、何らかの客観的な規範や理法に基づいて倫理を考えるのではなく、ひたすら心情の純粋さを求める考え方として、古代では「清き明き心」、中世では「正直の心」、近世以後では人を欺かず偽らず真実であれとする「誠」の心として受け継がれている。

日本文化の「主体性」は、また、外来文化を吸収するにおいて、自国に取り入れた外来文化を消化し、改造し、日本化すると同時に、その摂取は単純な模倣ではなく、現実的な必要性とその可能性を考慮した上で外来文化を選択し学ぶ点に見られる。

外来文化の吸収にみられる日本文化の「主体性」としては、まず、外来文化吸収の際の「主導性」を挙げることができる。日本は、世界において最も先進的な文化を吸収した。紀元6～7世紀頃、中国は古代アジアにおける文明の中心地のみならず、世界の文明の中心地でもあったので、日本は、中国の隋唐の先進的な生産方式と政治制

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com